

農業の登録内容は頻りに変更されます。農業は最新情報を確認して使用しましょう。最新情報は府・農の普及課、JA、Web版大阪府農作物病害虫防除指針 (<http://www.jpnpn.ne.jp/osaka/shishin/shishin.html>) から。農産物の病害虫発生予防については大阪府環境農林水産部農政室推進課病害虫防除グループ (<http://www.jpnpn.ne.jp/osaka/>)

# 営農インフォ

営農総合センター 営農指導課 (072-444-8001)

## 水稲

### 種もみの比重選と消毒

- ①種もみの準備  
乾もみで10a当たり4kg程度用意する。
- ②育苗箱の消毒  
育苗箱は事前にきれいに洗い、イチバン乳剤(5000~10000倍/瞬時浸漬または散布)で消毒しておく。
- ③比重選  
充実した種子を種もみとするため、比重選を行なう(表1)。

沈んだ種子を種もみとし、比重選後は十分水洗いをする。

④種もみの消毒  
比重選の終わった種もみは水を切った後、網袋等に5分目程度入れ、薬液(表2)に24時間浸漬する。このとき、

- ・薬液の温度は10℃以下にしな
- い。
- ・浸漬中は1~2回袋を薬液中

表1. 比重選における比重と硫安の量(水10ℓあたり)

種類	比重	硫安	食塩
うるち	1.08	1.4kg	1.1kg
もも	1.06	1.0kg	0.8kg

表2. 種もみの消毒に登録がある農薬

対象病害虫	薬剤名	希釈倍数	使用時期	使用回数	使用方法
ばか苗病 いもち病 もみ枯細菌病 苗立枯細菌病 苗立枯病 (リゾブラス菌、リゾグリア菌) ごま葉枯病 褐条病	テクリードC フロアブル	200倍	浸種前~1回/ 24時間種子浸漬		
いもち病 苗立枯病 (リゾブラス菌)	エコホーPJD (※2)	200倍	浸種前~催芽前/ 24時間種子浸漬		
ばか苗病 もみ枯細菌病 苗立枯細菌病	エコホーPJD (※2)	200倍	浸種前~催芽前/ 24~48時間種子浸漬		
イネシガレンチュウ	スミチオン 乳剤(※3)	1000倍	は種前/1回/ 6~72時間浸漬		

※1 薬液の量は種もみの体積と同量以上とする。  
※2 エコホーPJDは微生物を有効成分とした、環境にやさしく、安全性の高いイネ種子伝染性病害虫防除剤である。微生物を有効成分としているため、薬液は反復使用を避け、24時間以内に使用する。また、過度の風乾を避ける。なお、エコホーPJDはテクリードCフロアブル等、一部の農薬との同時処理ができない。  
※3 スミチオン乳剤はメーカーにより登録が異なるので、ラベルを確認して使用する。

### は種

育苗箱に育苗培土を入れ、ムラなく平らにし、十分かん水する。1箱当たり  
 催芽もみで180g(乾もみ160g)を均一にまき、種が隠れる程度に覆土する。出芽までかん水は行わない。

育種後、25~30℃程度に2~3日保てるようビニールや保温シートを上からかぶせて保温する。育苗箱の積み重ねは、10~15枚程度とし、一番上には土を入れた育苗箱を置く。保温の途中、温度差による出芽ムラをなくすため、上下の箱の積み替えを行なう。

◆**出芽**  
出芽した白い芽に徐々に弱い光を当て、葉緑素を形成させる。急に直射日光や高温にさらされると白化現象を起こすことがあるので、2~3日間は寒冷紗等で被覆する。夜温は10℃以上を保つ。

◆**ジャンボタニシの防除**  
本田の春耕はていねいに行ない、貝の数を減らしておく。入水時には水田の取水口に5~6mm目の金網を張り、水路から水田への貝の移動を防ぐ。

## 野菜

### 水なす

#### トンネル早熟栽培

トンネル早熟栽培では生育を早めるため、引き続きトンネル被覆を行なう。日中はトンネルのすそを開けて換気し、トンネ

表3. 水なすの害虫防除に登録がある農薬

害虫名	薬剤名	希釈倍数	使用時期/使用回数	10a当たりの散布量
アブラムシ類	トレボン乳剤	1000~2000倍	収穫前日まで/3回以内	100~300ℓ/10a
	アードント水和剤	1000倍	収穫前日まで/4回以内	150~300ℓ/10a
	アドマイヤー水和剤	2000倍	収穫前日まで/2回以内	100~300ℓ/10a
	モスピラン顆粒水剤	4000倍	収穫前日まで/3回以内	100~300ℓ/10a
アザミウマ	コテツフロアブル	2000倍	収穫前日まで/4回以内	100~300ℓ/10a
	モスピラン顆粒水剤	2000~4000倍	収穫前日まで/3回以内	100~300ℓ/10a
	アフアム乳剤	2000倍	収穫前日まで/2回以内	100~300ℓ/10a
	アルパリン顆粒水剤	2000倍	収穫前日まで/2回以内	100~300ℓ/10a
アザミウマ	コテツフロアブル	2000倍	収穫前日まで/4回以内	100~300ℓ/10a
	アードント水和剤	1000倍	収穫前日まで/4回以内	150~300ℓ/10a

※モスピラン顆粒水剤、アフアム乳剤、アルパリン顆粒水剤は、アザミウマ類で登録がある。

ル内が高温にならないようにする。開口部は徐々に広くし、5月中旬をめどに除去する。

また、着果促進のため、ホルモン剤処理を行なう。ホルモン剤処理には、トマトトーンの50倍液を用い、開花当日に噴霧する。樹勢が弱い場合は一番果をとる。

◆**病害虫防除**  
露地、トンネル早熟栽培では、ウイルス病予防のため、アブラムシ類やアザミウマ類の防除に努める。

ハウス栽培では、ミナミキイロアザミウマやミカンキイロアザミウマなどの発生に注意し、発生初期の防除に努める(防除薬剤は表3を参照)。

### しゅんぎく

#### 病害虫防除

べと病の被害が増加する時期である。密植やチッソ肥料が多いと発生が助長される。は種量を減らして薄まきし、ハウスの換気を行ない、多湿を避ける。適切な肥培管理に努め、被害率はほ場に放置せずに、処分する。5~6月は、べと病の被害が多くなるので、発生前にはZボルドー(500倍/1~1)で防除する。ただし、散布後は白く汚れる。

\*Zボルドーは、野菜類で登録がある。

### ごまつな

#### 肥培管理

栽培期間が30日程度と短くなるので、前作の肥料の残存量を勘案し、施肥量は減らす。ハウス内では水分不足になると要素欠乏などの生育障害が出るため、土壌水分に注意する。また、露地栽培では栽培期間が梅雨にかかる場合、湿害が出やすいので、高うね栽培し、水はけを良くする。

#### 病害虫防除

雨が多いと白さび病の発生が多くなる。薄まきを心がけるとともに、生育初期にランマンフ

### たまねぎ

#### 収穫

収穫の目安は、葉が70~80%程度倒伏した頃で、天気の良い日を選んで収穫する。

◆**貯蔵管理**  
風通しが悪いと病気が発生しやすいので、たまねぎの首部を早く乾燥させる。つり小屋では詰めすぎないようにする。

## 果樹

### みかん

#### 開花期の防除

訪花昆虫(コアオハナムグリ、ケシクスイ類)は、幼果にひっかき傷やリング状の傷をつける。また、灰色かび病は、果実にうろこ状の傷をつくる。8部咲き~満開頃に、訪花昆



\*農薬名の後の括弧内は、(希釈倍数/使用時期/総使用回数)を表示しています。

#### 更新

#### 腹接ぎや高接ぎによる品種(系統)更新

- ①接ぎ木時に穂木と台木の形成層を合わせる。
- ②接ぎ木部への雨水の侵入、乾燥防止と穂木の固定のため、接ぎ木テープでしっかり巻く。
- ③活着後は、接ぎ木テープを部分的にテープを破って発芽を助ける。
- ④複数発芽すれば、一芽だけ残し、風で折れないように支柱に誘引する。

### もも

#### 摘果と袋掛け

貯蔵養分による生育から、新葉の光合成による養分へと切り替わる時期であり、新根や新梢の伸長、果実の肥大が盛んとなる。そのため、新梢管理、摘果、袋掛け、病害虫防除と作業が遅れないよう計画的に行なう。

◆**摘果と袋掛け**  
生理落果の様子を見ながら、摘果は2~3回に分けて行なう。早生品種は、30~80cmの長果枝に品質の良い果実がなりやすいため、最終的に長果枝の中央部付近に1~2果、30~50cmの中果枝に1果を残し、5月中下旬から袋掛けを行なう。

晩生品種は、10cm程度の短果枝を中心に残す。残す割合は、短果枝5本のうち1本に1果となるように行なう。

#### 病害虫防除

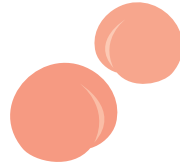
5月上旬に、黒星病や灰星病、うどんこ病の防除に、ストロビドフロアブル(2000倍/収穫前日まで/3回以内)を散布する。

また、アブラムシ類、シンクイムシ類、モモハモグリガの防除には、ロデイー乳剤(1000~2000倍/収穫前日まで/5回以内)を散布する。ウメシロカイガラムシが発生してい

る園では、オリオン水和剤40(1000倍)を散布する。5月中旬には、せん孔細菌病の防除に、バリダシン液剤(500倍)を散布する。

5月中旬には、せん孔細菌病の防除に、バリダシン液剤(500倍)を散布する。

\*オリオン水和剤40は、カイガラ虫類で登録がある。また、散布時は、オリオン水和剤40のみで使用する。



うめ

◆病害虫防除

黒星病は、老木での発生が多い。5月上旬に、ストロビードライフロアブル(20000~30000倍)を散布する。

また、カイガラムシ類が発生している園では、5月上旬にスプラサイド乳剤40(15000倍)を散布する。

ストロビードライフロアブル、スプラサイド乳剤40の散布に当たっては収穫前日数に十分注意する。

\*スプラサイド乳剤40は、小粒

\*農薬名の後の括弧内は、(希釈倍数/使用時期/総使用回数)を表示しています。

核果類で登録がある。

◆実肥

5月中旬に、10a当たり燐加工安S403(14,10,13)を20kg施用する。

いちじく

◆芽かき

芽かきは、葉が3~4枚展開する頃に行なう。一文字整枝で、せん定時に2芽残した場合は、次のポイントに注意する。

- ①上芽は勢力が強くなり過ぎるので取り除く。
- ②なるべく主枝に近い節の芽を残す。
- ③生育の早過ぎるものや遅過ぎるものを取り除き、生育をそろえる。
- ④果実へ十分日光が当たるよう、主枝の片面で結果枝が40cm間隔となるようにする。

◆病害虫防除

アザミウマ類の防除には、5月末から6月上旬に、モスピラン顆粒水溶剤(20000倍)を散布する。



万(に)備えよう



災害危機管理アドバイザー ● 和田隆昌

熊本地震に学ぶ直下型地震

2016年、熊本を中心に2度の震度7の大きな揺れが発生した群発地震が九州を襲いました。これによって熊本・大分では家屋の倒壊や崖崩れなどの土砂災害が多発、関連死を含めた死者は161人を超え、大変な被害となっていました。

海底のプレート境界で発生する海溝型地震と違って、この熊本地震のような陸地内の断層と呼ばれる場所で発生する直下型地震では、津波発生のリスクこそないものの、震源地近くでは家屋に壊滅的な被害が発生することがあり、今回も耐震性の低い木造家屋が多数倒壊し、家屋内で多くの死者が発生しました。九州地方は火山が多いこともあって、直下型地震や小さな地震は多数発生しているものの、特に熊本県では過去100年にわたって震度6以上の地震は記録されていませんでした。

現地での聞き取りによると、そのため住民の地震に対する危機意識は極めて小さく、備蓄はもろろんのこと、家屋の耐震性の向上についても関心は薄かったように思われます。直下型地

震の発生は、全国どこにでも可能性があり、非耐震の木造家屋に住むことは、倒壊家屋の下敷きになるリスクを抱えていると思わなければならぬのです。ライフラインの停止に備える備蓄も甘く見てはいけません。十分な備蓄を怠ったがために、早期に避難所生活となり、2次の健康被害を受ける可能性もあるからです。避難所は皆さんの想像以上に厳しい環境が待っています。熊本地震では地震による直接的な死者数の約2倍に当たる106人が環境変化による体調不良や病気などで亡くなっています。健康被害に遭わないためには、災害に備えた万全の備蓄をしておくことが、とても大切なことと思われ知らされたのです。

